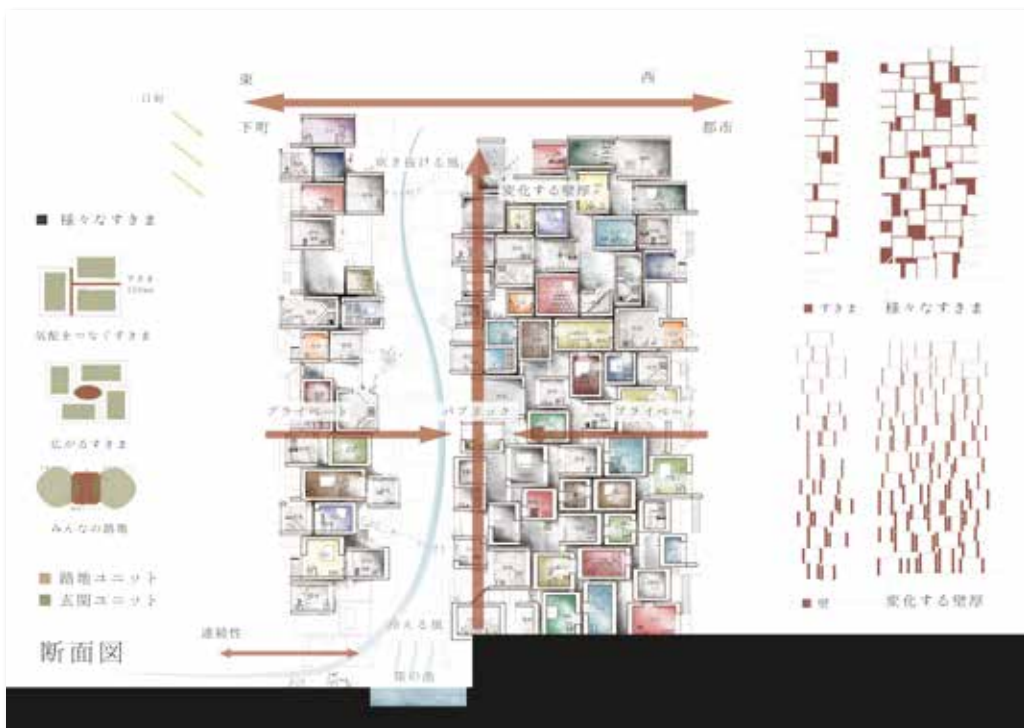


山川 大喜
(やまかわ ひろき)

日本大学
理工学部
海洋建築工学科



「下町」。都心という立地、住宅需要の増加、密集した住宅群が、濃密な住民間の関係を形成してきた。下町の暮らし方は現在の社会における開くというあり方ではなく、少し閉じることで関係性を得てきた。しかし下町の暮らし方は、耐用年数を超過した建物の倒壊や火災による広範囲での延焼の危険、変化する世帯、そして周辺から流れ込んでくる再開発の波によって失われつつある。本卒業設計では失われつつある下町の暮らし方を再構築する。開くことへのアンチテーゼ。少し閉じることでの関係性。下町の暮らし方をもった住宅の集合体を計画する。



講評

四ッ谷は嘗て美濃高須藩主・松平摂津の守の上屋敷があった場所で、「津の守」は風光明媚な庭園として新都・東京の名所となり、花街として賑わった時期もあった。この作品の計画地となった現在の荒木町の「津の守弁財天」付近では、多くの池が埋め立てられ、横に小さな池=策(むら)の池を残すのみとなった。本計画はこの策の池を中心に、失われつつある下町の暮らし方を見直し、下町の暮らし方を持った住宅の集合体の提案である。下町の暮らしとは、そこに暮らす人々の濃密な関係を基に、独自のコミュニティを築き上げてきたものと分析し、この少し閉じた関係を集合体の建物として実現するために、縦のEV動線、光や風の通る空間に路地を配置した上に、住民の生活ユニットを組み込んでいる。下町的なコミュニティを、ひとつの水平・鉛直に広がる集合体に完結させようとする試みは大変興味深い。しかし、下町の暮らしといえども地震や火災等に対する安全性に確保は必要不可欠なものであり、計画図面や模型からその配慮が感じられなかったことは残念である。住まい方には多くの先輩たちによる幾多の提案があり、時と共に変わる人々の暮らしを見つめ、提案を続ける建築家として活躍されること期待しています。(審査委員：古川 洋)